

二つの国の物語

第3部＝青い眼と青い海と

赤木由子＝作

鈴木たくま＝絵





赤木由子

1927年、山形県鶴岡市に生まれる。中国・鞍山常磐高女卒業後、新聞・雑誌記者となる。『柳のわたとぶ国』（理論社）により児童文学作家として出発。主な作品に『はだかの天使』（新日本出版社）『花と海の星座』（童心社）『ひまわり愛の花』（金の星社）など。日本児童文学者協会、日本子どもの本研究会会員。

住所＝東京都三鷹市下連雀6-10-521



作者 赤木由子（あかぎ・よしこ）

NDC913 A5変型 20cm 326p

画家 鈴木たくま（すずき・たくま）

8393-31518-8924

大河小説 全3巻

二つの国の物語 第3部 青い眼と青い海と 1981年3月第一刷発行◎

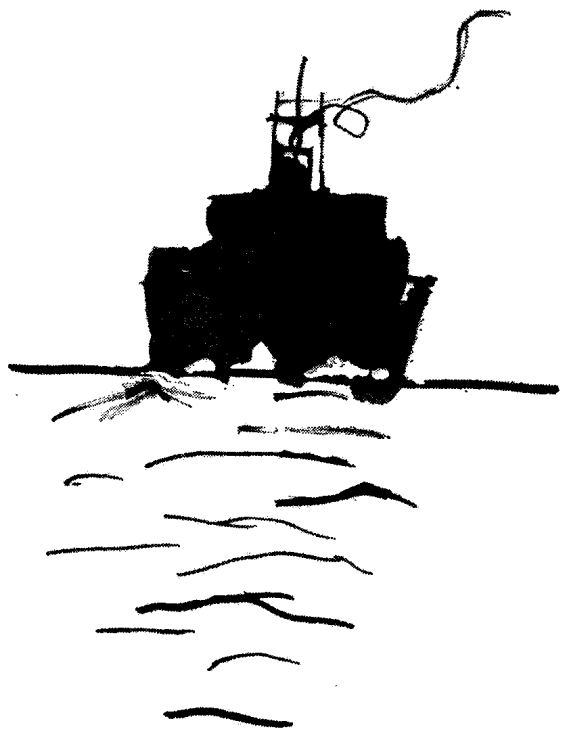
制作 小宮山量平 発行 山村光司 発行所 株式会社 理論社

住所 東京都新宿区若松町104番地 電話 03(203)5791 振替口座 東京9-95736

二つの国の物語・第三部

青い眼と青い海と

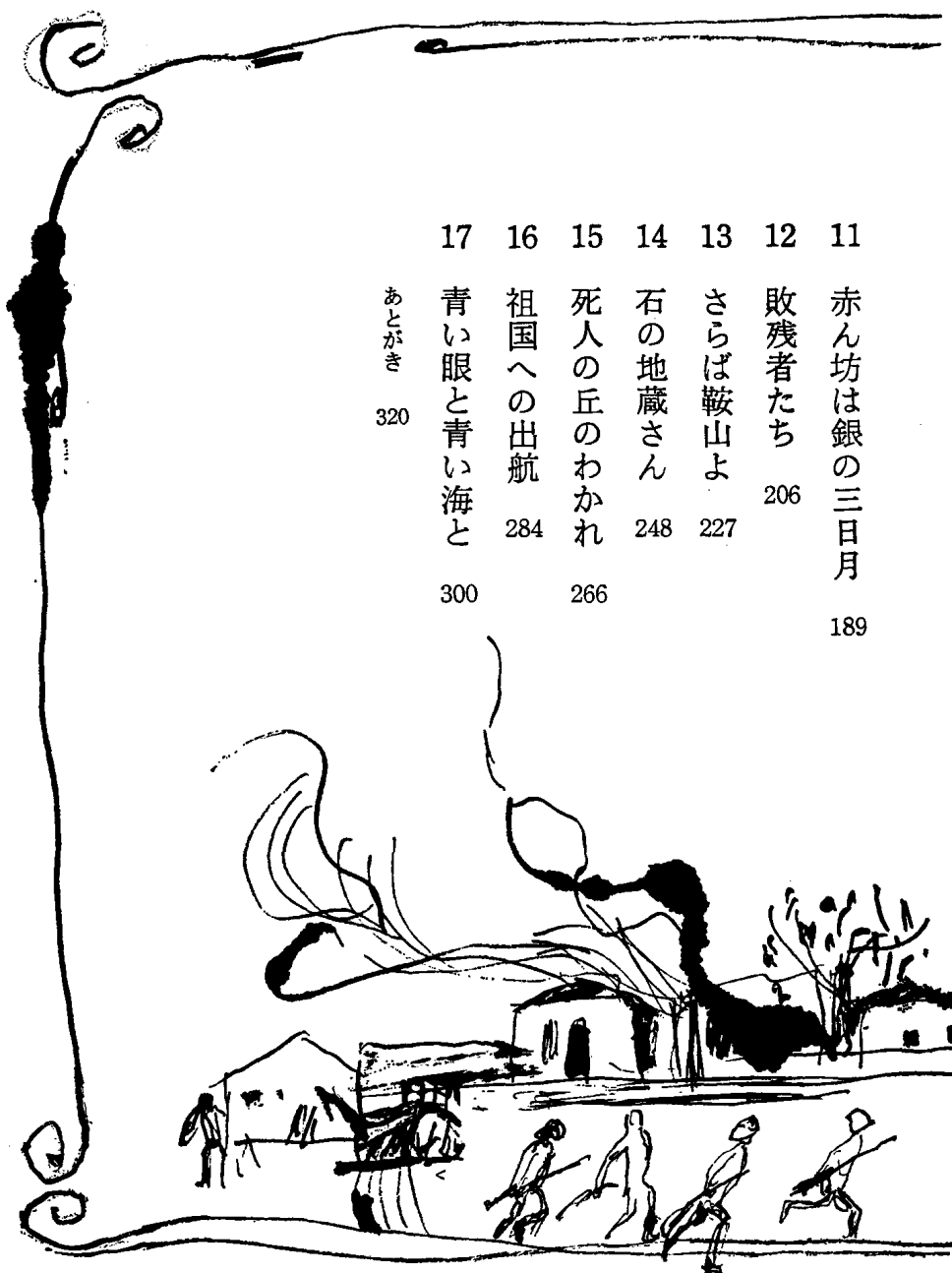
——もくじ



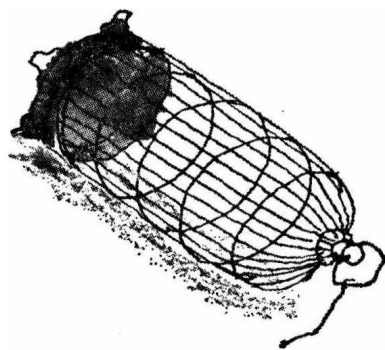
10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
虫けらのごとく	冬眠の季節に	鬼どもの宴会	異国に骨を埋めて	いのち永らえて	人間のかんづめ	敗走の山河	われら難民	敗れるとき	降伏への足どり
171	153	133	119	100	79	58	41	20	5



17	16	15	14	13	12	11
あとがき	祖国への出航	死人の丘のわかれ	石の地蔵さん	さらば鞍山よ	敗残者たち	赤ん坊は銀の三日月
320	284	266	248	227	206	189
	青い眼と青い海と					
	300					

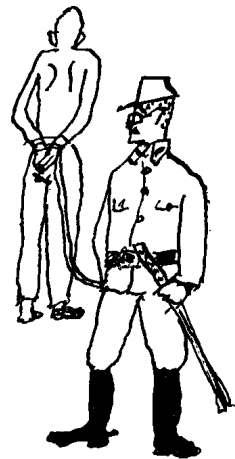


そうてい・さしえ
鈴木 たくま





降伏への足どり



アカシヤの街路樹が、青白い花のつぼみをつけはじめた。ヨリ子が朝の掃除をしているところに、タンスの上の電話が鳴った。中本たか子が、駅の公衆電話からかけてよこしたのだった。これから、家族ぐるみで日本へ帰るところだという。ヨリ子は、あきれて声をとがらせた。

「なによ、おわかれ会もしないでいっちゃうの？」

「だって、兄さんが、どこにもしらせるなって、いうんだもん。だから、いま、佐々木のばあちゃんと便所へいくって、うそついて、電話かけてんだよ」

電話のむこうの声が、中本たか子から佐々木としえにかわった。

「内地へついたら手紙だすよ。おたがい、元気でやっていこうよ」

「なにが、元気でやっていこうよ、なのよ。あなたまで、家じゅうして帰るの？」

「汽車がはいったよっ！」と、たか子のさけぶのが聞こえた。

「じゃあね。ごめんね」と、としえが言って、電話をきった。

機敏なたか子の兄としえの兄が相談しあって、店をたたんで日本へ帰ることにしたものらしい。

ヨリ子は、愛子に死なれたいまとなっては、もはや日本に帰りたいとも思わなかったが、いちおう三郎に、たか子たちのことを話してみた。三郎は、「ふうーん」と、目をきよろつかせただけだった。

ヨリ子は一平をうば車にのせて、松川医院へ行ってみた。昼休みの診察室で、松川先生は、一平がふとってきたのをよるこんでくれた。

「ねえ、先生。日本は、やっぱり、負けるんじゃないですか？」

「さあ、どうともいえないな。このあいだも、わたしは関東軍の上層部の人とあって、それとなく聞いてみたんだけど、去年からの大陸打通作戦で、活路をひらける見通しだといってた……」

「大陸打通作戦って、なんですか？」

「ほら、日本も、ミッドウェーの海戦からソロモン沖の海戦へと、負けつづけているだろ。こうなると、スマトラのパレンバン油田の石油も、ボルネオの油田の石油も、油槽船ではこんでくのが、むずかしくなってきたわけだ。そこで、中国大陸をまっすぐ、インドシナ半島までぶっとおして、石油をはこぶという計画なんだそうだ」

「なんだか、どろなわみたいですね」

「そのとおりだよ。軍人の考えることは、われわれには理解できないね。中国大陸の制空権も、すっかり、アメリカと中国におさえられているらしい……」

タバコに火をつけた先生の顔は、いかにも、ゆううつそうだった。ほどなく急患がかつぎこまれてきたので、ヨリ子は、いそいで診察室をでた。

その帰り道、ヨリ子は、道ばたにうずくまっている子どものこじきを見かけて、うば車をとめた。中国語で、どこからきて、どこへいくのか……と、聞いてみた。

灰色によごれた白い服にはだしのその子が、だるそうな目をあげた。年は六歳くらいだろう。その子の口から、「オモニ」とか、「アボジ」ということばがもれて出た。朝鮮人の子どもだった。ぼさぼさの頭から土ほこりをあびて、おなかをすかせているのが、よくわかった。

ヨリ子は、その子をおんぶすると、片手でうば車をおして家にもどった。たまごのおじやをつくって食べさせ、そのあと、ヤンが朝鮮人部落のクンアボジの家へ送りとどけた。

翌日、ヤンはヨリ子にいった。

「朝鮮人は、いまでもクンアボジの一族とおなじように、村を追われて、歩いて満洲へ逃げのびてきているんだよ。かわいそうに、あの子、家族とはぐれてしまったらしい。クンアボジがひきとってはくれましたがね。この子を助けてくれてありがとう……ってヨリ子にお礼をと、いつてましたよ」

ヨリ子は、重苦しいため息をもらした。

「どうりで、最近、朝鮮人のこじきが多いと思っただわ」

樗村たちはいま、旅順にある教員の短期養成所へいつているはずだった。半年間のその養成所へ、市川貞子の二組の子は二人いき、一組からは十人も応募していった。ヨリ子がクラスの一人一人に、「なんでもいいから免状とっておいたほうがいいよ」と、すすめたからだだった。

ヨリ子は、毎日、一平を外につれだすようにしていた。日曜日などは明子と青実もつれて、苗圃や駅前の公園であそばせた。そんなときは、はだしにさせて、かけっこ、なわとび、ボール投げと、なんでもやらせた。

ある日、明子と青実が、防空ずきんを背なかにかかけ、ランドセルをカタカタいわせながら、国民学校へとんでいったあと、ヨリ子は、いつものように一平をうば車にのせ、公園へいくのに、北三条の商店街を通っていった。中本洋品店は店の戸をとざしたままだったが、電気屋の佐々木の家は、中年の中国夫婦が、古道具と、禁制にふれないようなヒエなどの雑穀をならべて商売をしていた。

公園でしばらく一平をあそばせたあと、上田良子の家へまわってみた。ちょうど二階の窓に、良子の小さい顔が出ていた。

「上田さあん、ぐあい、どうなのオ」

「うーん。とにかく、だるいの」

「そう、ばあちゃんたちいなくなつて、つまないねー」

「ほんと。早川さん……あそこ……」

良子が、まむかいの国民学校の門のよこにある交番を指さした。

交番をとりまいてゐる日本人や中国人を、警官が追いはらおうとしていた。ヨリ子はうば車をおして、そちらへいつてみた。人だかりのうしろからのびあがつて見ると、交番の石段の上に、うしろ手にくくられた上半身はだかの苦力が、どうにか立ってはいた。けれども、さんさんに痛めつけられた背なかに、皮バンドのあとがなまなましく幾すじも血を流している。

苦力をしばったつなをもつて、憲兵が石段をおりてきた。あの片桐だった。黒ぶちのめがねをかけ、青白くむくんだ顔の右のほおには刀傷がある。苦力はまだ石段の上に、むこうむきに立っている。

「てめえ、さつさと、おりてきやがれ！」

片桐が、思いきりつなをひっぱる。苦力のからだは、うしろむきのまま石段の下にたたきつけられた。

見物人たちが、いっせいに、ひめいをあげた。頭のうしろをうった苦力の目が、くるっと白目をむいて、顔が灰色にかわった。口からは、たちまち血のあわが、ぶくぶくと出てきた。群衆のあいだに、

「ひでえこと、しやがる」

「死んだみたいだぞ」

そういった声が、ひそひそと、かわされた。

ヨリ子は、いそいでその場をはなれた。じぶんが血へどをはいたように、胸がむかついた。できることとならとびだしていつて、愛子のかたきでもある片桐を殺してやりたいとさえ思った。ウサギ狩りにあ

ったヤンの甥のエンケンのことも、思いだされた。いまの苦力も、昭和製鋼所かどこかの鉱山からでも逃げだしたところを、つかまっただのらう。

*

街路樹のアカシヤも、ヨリ子の部屋の東の窓に枝をひろげるアカシヤも、白い花の房を無数につけて、つよい香りをふきあげていた。その六月中旬のむし暑い日だった。

市公署の兵事係が、三郎に召集令状をもつてきて、三日後の夜十時に、鞍山駅の線路わきへ集合するように、といった。行くさきは、満洲とソ連の国境に近い、北朝鮮の羅南という軍港だった。

松川先生がとんできて、ヤンもいっしょに、これからの商売や暮らしむきについて相談をした。そのあげく、葬式屋は、ひとまず店じまいすることになった。

松川先生もヤンもため息をついて、日本、イタリヤとともに三国同盟をむすんでいたドイツが無条件降伏をしたとか、イタリヤの首相ムッソリーニがパルチザンに殺されたらしいなどと、話していた。

「日本も、いよいよ本土決戦の腹をきめたらしいが、敵が上陸してきたら、女、子どもまでもが、竹やりでたちむかうなんて……」

松川先生の肩が、きゆうに、やせほそって見えた。その先生が、目もとでヨリ子にわらいかけた。

「こうなってみると、ヨリちゃんの判断が正しかったということになるね。三郎さんも、ヨリちゃんがいつてたように、たとい千坪でも、内地に土地を買っておけばよかったね」

ヨリ子が、口をとがらせた。

「先生。あのときは、わたしは姉さんにたまごを食べさせたいと思ったからよ。それに、日本がもしドイツみたいに無条件降伏にでもなったら、土地もなにもないじゃないの」

「そりやそうだ。わたしが悪かった。ところでヤンは、どうするつもりだね？」

「わたしは、いちど延安^{えんあん}にいった、それから考えます」

日本だけではなく、中国は、もっとまえから動乱のまっただなかにあるのだ。最近の日本軍は、空軍にせよ地上軍にせよ負けつづけながらも大陸打通作戦をつづけている。いっぽう中国の国内では、蔣介石がアメリカからの武器援助により八路軍をたたきつぶそうと躍起^{えつき}になっている。ヤンの気が重いのも、あたりまえだった。

葬式屋を開業するときも早かったが、店じまいはもっと早かった。棺桶^{かんがけ}や花輪などはそのままにして、従業員が退職するだけでいいのだ。テイの妻が、目立ちはじめていたおなかをさすりながら、ヨリ子に「おまえらは、アメ公どもにやられるんだろ、ふん」と、にくまれ口をたたいたその口の下から、「木綿の布をくれ」と、いうのだった。ヨリ子は、いわれるとおりにだしてやった。

召集令状がきてから三日めの夕方には、テイ夫婦が、手ぎわよく家財道具を馬車につみあげて、出ていった。そのあとで、いよいよ、ヤンがじぶんの馬車にのりこんだ。馭者台^{ぎょしや}にあがって、両手に手綱^{たづな}をにぎったヤンの陽にやけた長い顔は、さすがに、さみしそうだった。

ヨリ子は、ヤンの馬車の白い馬のほおを、かるくたたいてやりながらいった。

「ヤンおじさん、これから、どうなるんだらうね。春秀も、どこで、どうしているんだらうね」

ヤンが、ヨリ子にしずかにわらいかけた。

「おたがいに、明日なにが起きるかわからないけど、わたしらは、どんなときでも、働く仲間をうらぎするような、ひきような生きかたはできないということだけは、たしかだらうね」

「ほんとね。わたしも、そう生きるよう努力するわ。ヤンおじさん、いろいろありがとう」

「いえいえ、こっちこそ。ヨリ子も、がんばるんだよ。きつと、またあえるように、いのっているよ」ヤンが、「それじゃ」と、両手の手綱^{たづな}をひとふりすると、三頭の馬が、さっと走りだした。



ヨリ子は、馬車が見えなくなるまで見送っていた。

黒い布で包んだ電気の下で、夕食をすませた。門出の祝いにタイグライはつけたいところだったが、タイどころか、このごろは週に一度、くさったような魚が配給になるだけだった。それに、きゆうなことなので、買物にもいかれなかった。

三郎が、手さげ金庫のカギをだまっつてヨリ子にわたして、仕度にかかった。奉公袋と書いてある長さ三十センチくらいのふくろに、下着を二枚と、くつした、ちり紙、タオル一本、軍隊手帳などをいれた。

ヨリ子は、三郎がくつしたをはきかえるのを見ていた。三郎の足のうらは、扁平足へんぺいそくをとおりこして、まんなかもありあがっている。あんな足で、これから、いったいどれだけ行

軍をさせられるのだろうと思うと、ヨリ子は、三郎がかわいそうでならなかった。

そのときになって、ヨリ子は、三郎の年が三十六歳なのにはじめて気がついた。

明子^{あきこ}が、三郎の肩に、うしろからもたれかかった。

「お父ちゃん、いまごろ、どこへいくの？」

「うん、ちよつと、そのへんにな」

三郎は、この三日間、じぶんがいなくなったあとのことを、ヨリ子にたいし、なに一つ注意をあたえようとしていなかった。それだけ、あとのことはどんなにじたばたしても、なるようにしかならないと、覚悟^{かくご}をきめているらしかった。

明子たちが、ふとんにはいった。一平をまんなかにして、しばらくは、いつものふざけっこをしていたが、まもなく、眠ってしまった。

しのぶが死んでから、明子も青実^{あおみ}も、三郎と愛子の戸籍にはいつていた。だから明子たちは、ヨリ子が長女で、みんなほんとうの姉弟^{きょうだい}なのだと思っているようすだった。

九時になった。三郎は、湯のみのぬるくなったお茶をのみほすと、そばにおいてあった奉公袋^{もうしやう}と木銃^{もくじゆう}をつかんで、立ちあがった。寝ている明子たちのふとんのそばへいつて、三人の寝顔をのぞきこんだ。やはり一平が気になるとみえて、一平を、じっとみつめた。

一平は、ようやく一年八か月だった。ふとってきたみじかい足を、青実のおなかにのせかけている。無心の幼ない子へのおしさがこみあげてきたのか、三郎はわずかに鼻をつまらせた。そのとたん、青実が、眠ったままだいだした。

「十五夜お月さん 見て はーねーるー」

三郎が、ふふ……と、わらった。

「なんだ、こりゃ」

三郎は、首をふると、部屋を出ていった。ヨリ子は、駅までついていくことにした。三郎は、「家にいろ」とは、いわなかった。

駅までは歩いて二十分たらずだったが、早めに家を出ることにしたのだ。二人とも、だまって歩いていった。空は暗かった。地上も、暗くてむし暑い夜のときどきにつつまれていた。

すこしまえまでは、町内から出征兵士が出ていくたびに、みんなで日の丸の小旗をふりふり、にぎやかに駅まで送っていったのに、いまは夜の闇にまぎれて、ひっそりと出かけていくのだ。

ヨリ子には、三郎の木銃がふしぎでならなかった。長さ二メートルほどのただの棒きれを、「やあ」とつきたしたりして、敵の戦車や、海からの艦砲射撃のまえへ、とびだしていくのだろうか。

駅に近くなるにつれて、あちこちの道から、木銃をもった男たちが、ひたひたと歩いてくるのといきあった。暗くて顔はわからないが、たがいに、「やあ」と、低い声をかけあっていた。どの人も、つきそっている家族は一人くらいで、本人だけという人も見られた。

駅から北へ二百メートルほどはなれた線路わきの草むらに、そうした人びとが、すでに黒ごろとうごめいていた。線路には、有蓋貨車が、なん輛もつらなつてとまっている。

しばらくすると、懐中電灯をもった将校が、家族は家にもどるように……といった。

ヨリ子は、しきりになみだをふいている女たちと一たんは駅まで行き、そこから、草の底をはうようにしてひきかえすと、ほど近い草むらに、そっと腰をおろした。

貨車のまえに群がっていた召集兵たちが、整列をはじめた。懐中電灯があちこちへ動き、将校のおし殺した声が、暗やみのなかの人員点呼をくりかえしている。

やがて、めったに生きてはかえれない男たちを無雑作（むざさく）にのみこんだ貨車は、車輪の音をしのばせるよ

うに動きだし、すぐに、闇にとけこんでしまった。

まぼろしを見ているような心地だった。なににもかも、暗いなあ……と思った。おなかの底をこすられるような孤独の思いが、とめどもなくこみあげてきた。

きゆうに、ヨリ子のからだは動かなくなり、股のあいたを熱い液体が、かつてに流れ出ていった。ヨリ子は、それが流れるのをこらえるちからもないまま、もはやだれ一人いなくなった線路わきへはいずっていくと、線路に耳をおしあてた。ごうごうと、はるかな車輪の音がひびいてきた。それもすこしずつ遠のいていってしまうと、三郎のことばにだせない遺言のうめき声のように、シ、シ、シ……と、ヨリ子の耳にのこりつづけるのだった。

*

いつも、あんなにおおぜいの人が入りし、馬がいなかったり、電話が鳴りつづけていたのが、あつけなく、がらんとなつてしまった。そんな家に、今、十六歳のヨリ子と明子たちだけがのこった。

ヨリ子は新聞を見るのが、いやになっていた。昭和十六年暮れの開戦から二年間くらは、「わが軍大勝利」とか、「この一年にほうむった敵機・敵艦の総数四千数百」とか、大きな活字で紙面はにぎわっていた。しかし、張国鋒たちから聞かされた戦況によれば、日本が勝ちほこっていたのは、開戦後、たった半年間だったという。そして去年の春からは、夕刊がなくなり、朝刊も二ページになっていた。

（新聞を信じられないとしたら、なにを信じればいいんだろ）と、ヨリ子は思った。

しかし、のんきにそんなことをいってはおれなかった。B 29が、たびたびやってくるようになり、製鋼所はもちろん、町はずれの国民学校にまで爆弾をおとしていった。ヨリ子は直接に見なかったが、その爆撃で多くの子どもたちと教師が死んだということだった。

明子と青実が、学校からの便りをもってきた。校長先生から保護者各位へ……として、へ子どもたち